

所 陵

No. 9

関西大学考古学等資料室彙報

昭和59年 5月31日発行



土偶(岩手県北上市更木出土)

目 次

聖なる甕棺—考古学と文化人類学との接点の一例—	2
横穴式石室羨道入口天井部の施設について	3
コプト人のランプ	4
朝日照る佐田乃岡辺の古墳群	6
末永雅雄先生御寄贈の復原冑の資料	8
神田孝平著『日本大古石器考』補遺	9
資料研究—愛媛県出土平形銅剣について—	12
資料紹介(古式土師器・須恵器)	13
近畿の美術館・博物館施設	14
資料室ニュース	16

関西大学考古学等資料室

〒564 大阪府吹田市山手町3の3の35(06—388—1121)

聖なる甕棺—考古学と文化人類学との接点の一例—

横 田 健 一

アイヴァ・エヴァンズ (Ivor H.N.Evans) の著、『英領北ボルネオとマレー半島における宗教、民俗および慣習の研究』(“Studies in Religion, Folk-lore & Custom in British North Borneo and the Malay Peninsula” 1923, new ed. 1970) には、次のような甕崇拜に関する報告があり、日本古代の甕棺葬の研究に参考となる。なお英領北ボルネオは現在東マレーシアとなっている。

北ボルネオ・ツアラン地方のドウスン族はある種の甕を崇拜しているが、その殆どは中国製の緑褐色で、腹のふくらんだ、しばしば表面にヒビの入った年代物である。彼等は各甕には祖先の靈魂が宿ると考え、犠牲をそなえると祖霊は上機嫌で、恵を与えてくれるが、そうしないと悪くとり扱われたと思う。家中や村に病気があると供物がささげられる。(P. 3~4)

オムボイ部落のドウスン族は、死者があると富裕な者は、埋葬前、約一か月も死体を埋葬用の甕に納め、封をして、家の中に置いておく。貧しい者は、甕が買えないので、死んだその日に死体を埋めるか死体をむしろに包むか、粗製の木棺に入れて埋葬する。(P. 14)

右の記述のうち富裕な者の慣習は、わが古代の^{もがり}殯を連想させる。

墓地では甕棺の上縁が地表面に突き出ていることがある。墓地附近の住民は、甕を掘り出して、再使用することがあるが、その場合、30年は経過していなければならない。(P. 14~15) この記述は、日本でも33年たてば御先祖様になって、祭り上げが行われる風習を思い合わせさせる。

ツアランのドウスン族の墓の上には小さな小屋が建てられ、その小屋には台所がつけられ、死者の靈魂の食物として米の包みが、床の上に置かれる。葬式に参列した人々は、帰ると^{みそ}禊ぎをする。(P. 15) 墓上の小屋は、わが国の墓上のカリヤを連想させる。(近藤直也著『祓の構造』参照)

甕棺は原則として死体を納めるだけの大きさのものであるが、そうした大きさの甕が得られない場合は、ある村では、墓の上に小さな甕を地上に置き、死体は粗製の棺に入れるか、むしろに包んで埋納する。ある場合には、わずか1フィートの高さの小甕が墓上にたてられている。

墓の塚は、野猪が死体を掘って食わぬように、上に尖の鋭い竹の葉で編んだ織物を掩うことがしばしばある。

低地地方では、小さな壁のない小屋(カリヤ)を建てるが、その屋は大きくカーブし、洋傘状の構造をもち、ヨーロッパ製の更装で掩われ、一つのカリヤではなく、各墓ごとに2つのカリヤが建てられる。

カリヤの中には、時には木製の人形が置かれる。著者は現地人に、それが死者をあらわすものか、人身犠牲すなわち供養された奴隷の代用であるかたずねたが、要領を得なかったという。(P. 32)

この人形は、わが古墳上の人物埴輪を考える上に参考となる。近藤氏前掲書のソホドの説も考え合わせられる。

低地方のナバー、ピアサウその他の村々では墓の周囲に竹垣をめぐらし、豊富に色彩を施した^{ほう}包丁、鶏、水牛、劔、槍、鉄砲などの模型をある種の棕櫚の樹の髓で彫刻して、つくって、竹垣に沢山かけている。(P. 33) これなども器物埴輪を連想させるものである。

ピアサウ族のシリナンという人が、著者エヴァンズに語ったところでは、食物は供えないが、水を竹筒に入れて垣にかけて供える。死者の衣服も墓の側の木の枝に掛けて供えないと、災を招くという。葬式後は会葬者全員が川へ行き、禊をする。

甕棺が小さ過ぎたり、口が小さくて死体を入れ難い時は、甕を水平に切断し、死体を下半分に入れて後に、切り口を樹脂でつけるという。(P. 33)

他にも興味深い記事が多いが、別稿にゆずる。



Peter Metcalf "A Borneo Journey to Death" P.82 による。甕の上半部の切り口のあとに注意されたい。

横穴式石室羨道入口天井部の施設について

網 干 善 教

昭和8年と10年の2次にわたる石舞台古墳の発掘調査から50年目にあたるのを記念して、巨石を運搬し、構築した石舞台古墳を実験的に復原することになり、昨年来から計画し、検討を重ね、本年2月実際に構築する作業を行った。この試みは一応成果をおさめたが、その後も今回の実験によって得た知見をもとに、さらに研究を積み重ねるため、奈良県下を中心に巨石を用いて架構した横穴式石室を対象に検討をすすめている。今回の実験作業は奈良市の飛鳥建設社長左野勝司氏を煩わしたが、左野氏は古墳の現地に同行され、石材の運搬や構築技術について、専門的な立場からの観察を試みられている。

先日、左野氏と共に飛鳥と磐余地域の古墳を見学し、巨石の石組みを観察しながら忌憚なく意見を交換した。その中で新しい知見のあったことを紹介しておきたい。

櫻井市安倍文殊院境内にある特別史跡文殊院西古墳と高市郡明日香村越にある史跡岩屋山古墳は花崗岩の切石を用いて構築した精巧な横穴式石室としてつどに知られる。

両古墳を比較すると玄室の側石と奥壁に使用した石材の大きさに若干の相違はみられるが、天井石が一枚の切石を使用していること、羨道の天井石が、入口より奥側に至る間に一段低くなるという特殊な構造になっていること、さらに羨道入口端の天井石に溝状の掘り込みがみられることなど、共通的な構造が見られる。

さて問題は、その羨道入口天井部にみられる溝状の構造であるが、従来の観察では、埋葬後、羨道入口部を閉塞するために設けられた扉状ものをはめ込むための加工と考えてきた。ところが左野氏と現地における意見交換のなかで、従来から考えてきた溝の用途が、果して扉状の施設のために加工されたという解釈に若干の疑問をもつようになった。

昭和53年8月、史跡環境整備事業の事前調査として岩屋山古墳の石室内部を発掘調査したとき、羨道入口天井部の溝状加工は扉状のものをを用いた閉塞施設であろうということを前提とし、その対

応する直下の部分にこれを実証する状況として何らか特別な痕跡が認められないかをより注意深く、堪然に観察したが、何らの痕跡もなかった。これにはいささかの疑念をもっていた。

ところで、今回左野氏と溝状の加工について観察結果、溝は天井石に施されているものの、この状態では閉塞のための扉状の施設をはめ込むことができないという点に注目した。扉を施すことができないとなると一体この施設は何のためにつくられたものであろうか。しかもこれが岩屋山古墳にも、文殊院西古墳でも見られ、両古墳とも切石の古墳であることから疑問は一層深まる。

勿論、溝状のものがあるだけでは、用途について確定することはできない。そこで、その可能性について検討してみた。ただし、これはいわば推定であり、仮定であって、特に確証があるわけではない。

得た一つの可能性は、俗に「水切り」といわれる施設ではなかろうかという憶説である。羨道入口部の天井石の部分は侵水の可能性がある。これを阻止するために、往々としてこのような溝を切り込むことがあるという。そう考えてみれば、それなりの理由があろうとも思われる。

かつて見た明日香村平田所在の鬼の雪隠の石槨入口の溝と異っている。この場合は栓状のものを挿入する閉塞石にともなうものである。

岩屋山古墳、文殊院西古墳のこの特殊な施設について左野氏と共に一案を提しておこう。



岩屋山古墳の天井溝状加工

コプト人のランプ

加藤 一 朗

人間の遠い祖先である旧石器人類が生活進化の過程で、他の霊長類動物と異った道を歩むに至った重要な契機の一つが、火の性質の認識とその利用法にあったことは疑いえない。つまり彼らは自然発生的な山火事であったような場合、最初は逃げまどうばかりであったが、ある時点で火熱に興味を覚え、なお燃え続けている木の枝などをもちかえり、ねぐらである洞窟の入口において暖をとったり、猛獣の撃退にもちいたり、またそれを獣肉を焼く——火食のはじまり——ことにもつかったであろう。やがて彼らは、夜間における火の効用が熱としての恩恵をもたらしたばかりでなく、光の恩恵をもそなえていることにも気がついたことであろう。その結果、一例を挙げるなら、有名なスペインのアルタミラの洞窟画なども樹脂や獣脂を材料としたたいまつや凹みのある石塊（天然の石皿）に盛った脂に点火することによって、洞窟の奥の天井を照射しつつ野牛などの絵を作成したものと想定されている。

新石器時代になると、まず円い皿型の土器に植物性の油を入れ、縁の一箇所に灯芯を置いてこれに点火し、ランプの代用としたにちがいない。もっとも、住居の中心部に炉をつくり、ここで燃やす薪が暖気とほのぐらい光をもたらしたケースも決して少なくなかったであろう。このことに関しては、先年筆者は案内人（ドイツ系の旧友カルロス・レンケルスドルフ）とメキシコ・チャペス州のあるマヤ人の村に一泊した経験がある。ここには電気も灯油もなく、夜になると家族たちは一室に集り、中央の土製の四角い台の上で薪を燃やし続け、この中で金属製の容器に入れたコーヒーをわかしたり、うすぼんやりとした薪の光でお互いの顔がやっと識別できるような状態の中で団欒の時を過ごしていた。私どももこのような家の一つを訪れ、カルロスのあやつるスペイン語とマヤ語を通じて家族たちと世間話に花を咲かせた。

さてわが国ではローソクの発達が比較的早くまたこの方が便利であったので、灯油による家庭内の照明、というよりも、灯油の受け皿の形にはあ

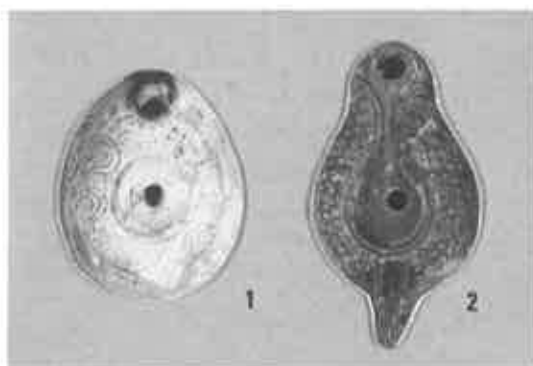


写真1 写真2
コプト人のランプ

まり変化が起らなかったのではあるまいか。江戸時代の行燈にも皿型容器がつかわれ、その行燈が幕末か明治のはじめにヨーロッパから伝わったガラス製のいわゆる「ランプ」とってかわられたのであろう。しかし地中海沿岸から西アジアにかけては、早い時代に土器製のランプの発達（あるいは変形）が見られるようである。筆者の知識の範囲では、図1のA→B→Cのような順序で発展を見た。いずれも平面図（上から見た図）であって、Aは円い皿、Bはお菓子のクレープのように四方を内側に折り曲げたもの、Cは2方から折り曲げたものである。Cのような形になったところから、底面にはお茶碗のいとしのような低い台がつくことになる。灯芯の材料は地方によって異ったであろうが、図2に示したようにエジプトではこのような象形文字（ヒエログリフ）で表わされ、先年物故した今世紀最大のエジプト学者の一人であるA. ガーディナーによると、これは「麻糸をよじって作ったもの」で、後代には「ローソクの芯」をも表わしていた。

図1のCから発達したものが写真1であり、さらにその洗練されたものが写真2であると考えて宜しいであろう。この2つの「コプト人のランプ」は陳列室のガラスケースの中におさめられていて「エジプトのかんてら」と説明されている。かんてらよりランプの方が現在の読者には耳慣れていることと思い、本稿ではもっぱら「ランプ」とし

て筆を進めている。筆者の恣意であるがお許し願いたい。写真1と2とはエジプト出土のもので、製作時代は紀元後3世紀から5世紀ごろのものと推定される。このころのエジプト人はそのほとんどがキリスト教徒であって、コプト人とよばれている。

コプトという言葉はわが国ではおもに「コプト織」というすぐれた染色織物によって知られているようである。過日京都府立資料館でも「コプト織展」が開催され、わが国に現存するコプト織(断片が多い)のなかから逸品が集められていた。その染色技術、いかにも素朴な模様、麻糸と羊毛糸とを織り合わせたまことに高度な織り方は、とくにこのような仕事にたずさわる見学者たちに多大の感銘を与えたようである。

ここで少しコプト人について説明しておきたい。「コプト」とは実は「エジプト」という言葉のなまったものであって、コプト人を「エジプト人」といってしまっても宜しいわけであるが、紀元後2世紀ごろからキリスト教化したエジプト人を、7世紀にエジプトを征服したアラビア人が彼らを「コプト人」とよび、その子孫たちは今日でも「コプト人」とよばれているので、キリスト教徒のエジプト人は慣習的に「コプト人」ということになっている。

コプト人の用いたコプト語はまさしくエジプト語そのものののであるが、時代的なずれがあるので、ピラミッドによって象徴される「王朝時代」のエジプト語とはかなり変わってきており、文字も象形文字ではなく、ギリシア語のアルファベットをもとにして作ったコプト文字を用いていた。エジプトのキリスト教について一言すれば、キリスト教発生初期にはエジプトのアレクサンドリア教会が総本山の一つであり、むしろキリスト教の

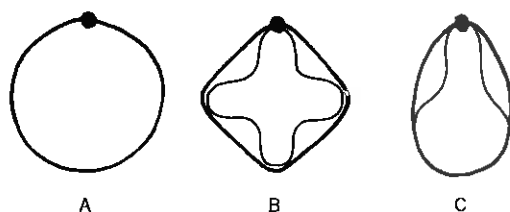


図1 土器製ランプの変遷
(黒点の部分が灯芯の位置)

主流を代表していた。しかし、地方に住む一般農民の信奉するキリスト教はしだいにモノフィジット(神・人キリストの神性のみを強調する単性論)という宗派を形成し、キリスト教界全体からすると非主流となったこの宗派がエジプトでは主流となった。そしてアラビア人によってイスラム教への改宗を強いられ、その信者はいちじるしく減少しつつも、今日まで細ぼそながら伝統を保っている。またキリスト教修道院の発達の出発点となったのがコプト人の集団であったことも西洋史上著名な事実である。このようなコプト人の作りあげた文化がコプト文化であって、その盛期は3世紀から5世紀にかけてであり、政治的にはエジプトがローマ帝国に服属していた時代である。文化的にはエジプト農民の素朴な信仰を基調とし、そこへ西アジアやギリシアの文化の影響がかいまみられる。残存するおもなものは織物・彫刻・絵画(死者の肖像画)・銅器・土器などであるが、写真1と2とは土器の好例である。形といい模様といい謙虚な優しさが見るものの心を強くとらえる。ともに中央の穴から油(ゴマ油・麻油・モリンガ油・オリーブ油など)が注入され、(写真の)上方の穴に灯芯をおいて火をともし、教会、修道院や家庭で用いられたものである。写真2には把手がついており、このランプを側面から眺めると『アラビヤナイト』にでてくる「アラディンの魔法のランプ」を彷彿とさせよう。



図2 灯芯を表わす古代
エジプト文字(音はハト)

朝日照る佐田乃岡辺の古墳群

「万葉集」巻一には草壁皇子への挽歌23首が収められており、そのなかに「佐田の岡辺」「眞弓の岡」という地名が詠まれている。飛鳥桧隈の西方に連る低い丘陵地がこの丘と考えられ、眞弓、佐田という集落があつて、まず間違いない。

一方、天武天皇、草壁皇子の在位の時期といえは考古学上の時代区別からは終末期古墳に編年される墳墓が築造された時期である。

欽明陵、天武・持統陵、文武陵の陵号に各々「桧隈」という地名を付することからみても、この地域における終末期古墳の重要性が察知できる。

ところで、眞弓丘、佐田丘と称される丘陵内には、岩屋山古墳、牽牛子塚、マルコ山古墳やそして昨今切石造りの石櫛という特異な構造をもつことが判明した東明神古墳などがある。東明神古墳の西方約1.6kmの位置には斉明陵(太田皇女、建皇子墓)に比定された陵墓もある。



一方桧隈の北の地域内には欽明陵、天武・持統陵、鬼の雪隠・粗などがあり、南の地域には中尾山古墳、高松塚、文武陵がある。

そうしたなかで、眞弓、佐田丘にある牽牛子塚、マルコ山古墳の発掘調査を行い、今回佐田の東明神古墳の発掘が行われ、これが草壁皇子陵ではないかと騒がれている。

この調査について5月20日、奈良県立橿原考古学研究所と高取町教育委員会から現地説明会資料

が配布された。

それによると、古墳は屋根斜面を幅約70m、高さ10mにわたって掘削し、その平坦部の中央に直径18m、高さ4～5mの墳丘が版築工法によって構築されている。

石櫛は切石を積み上げたもので、東西両壁は下五段を垂直にし、それより上部が約60度の傾斜をもって持送られている。石櫛の規模は長さ312cm、幅206cm、高さは東西両壁の垂直部が127cm、床面より天井部と推定されるところまで約250mある。床面は二段に敷きめられ、当初の遺物としては漆塗木棺の一部と金銅製円形金具が出土し、その他に被葬者の歯牙6点が検出されている。

この東明神古墳は現地説明会資料でも指摘されている如く、従来の日本古墳では数例の見ない古墳構造を示していることは事実である。そして、石櫛、棺の構造、須恵器などから総合的に判断すれば7世紀後半から末期の頃の古墳と考えられる。また、検出された歯は青年期から壮年期と推定されるが、男女の性別は不明であると述べている。

一方新聞が報じるこの東明神古墳の被葬者は、そうした説明会資料とは別に草壁皇子の陵である可能性をかなり強調していると受け取れる内容である。

本来、古墳の被葬者を明確にすることは考古学の立場からできない。むしろ考古学上からのアプローチは、構造を正確に把握し、それにふまえて、理論的な考証を行うことを常道とするものである。この点からいえば、現在明らかにされた東明神古墳の資料からだけでは被葬者を考定することはできないであろう。

万葉集にみる草壁皇子の挽歌に佐田岡、眞弓岡とあるから、その陵は岡辺であることは考えられ

る。だがその佐田岡と眞弓岡という二通りの表現が一体どのような関係であるのかはわからない。先きにも述べたように現地名として高取町佐田があり、明日香村眞弓という集落がある。したがって、この辺りであることは間違いなからうが、万葉集の歌からだけでは決定できない。

さらに、この辺りには東明神古墳の外にもマルコ山古墳などのように終末期古墳が存在する。したがって、いますぐ東明神古墳と草壁皇子陵と比定することには危惧がある。

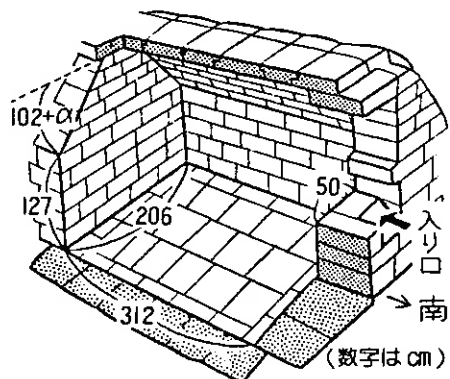
次に被葬者の歯についても現地説明会資料には青年から壮年期とあり、かなり年令幅がある。歯の男女の性別も不明であると記していることからすれば、これだけではある特定の被葬者を考えることはできない。

また、埋葬主体部の構造が、従来の知見にない特殊なものだけに、ある限られた年代を決定することもできない。遺物をみても、残存するのは棺の一部と金具1点だけであって、これをもって、ある特定の年月を決めることもできない。

さすれば、これら資料からだけでは、被葬者の判定はむづかしい。これが正解であろう。

一方、高松塚の調査以後「聖なるライン」という不可解なものが喧伝された。藤原京の南中線上に古墳が並んで築造されている。故にこの線上に乗って築造された古墳は天武・持統天皇とかかわりのある高貴な人物の墳墓であるとする説がある。一見まことしやかに聞えるが、その線上にあるという菖蒲池古墳の被葬者は全く問題とされていない。また線上にあるという文武陵の真偽を疑っている。

若しこの聖なるラインが存在し、それが格別の意味をもつものであれば、この線上にない牽牛子塚やマルコ山古墳、さらには東明神古墳の被葬者



東明神古墳の石槨(せっかく)推定復原図
(現地説明会資料による)

は誰であるかということが問題となる。ことに天武・持統陵と文武陵が線上に築造されているとなると、草壁皇子陵がそこになんていないということになれば、聖なるラインはどうなるのか。まずこの問題から検討していかなければならない。若しこの聖なるラインを是認すれば、理論的には東明神古墳は草壁皇子陵である可能性はなくなる。他方東明神古墳を草壁皇子陵だと主張すれば、聖なるラインの存在の意義は薄れてくる。こうした矛盾を知りつくしながら、なお聖なるラインの存在とその意味を認め、東明神古墳を草壁皇子陵だと主張するのは一体どうしたことなのだろうか。

朝日照る佐田岡辺の古墳群の各々の被葬者は誰であるのかはわからない。しかし牽牛子塚、マルコ山古墳、東明神古墳では遺体の一部が検出されている。誰の墳墓であるか急いで決める必要はないし、若し永久に不明であったとしても、それらの古墳の価値が低下するものでもない。むしろ警戒すべきは世論によっていかにもそれが真実のように思わしめることであって、極めて危険視すべきである。かつて偏向した史観によって、多くの犠牲が生じたように。

(綱干善教)

末永雅雄先生御寄贈の復原胄の資料

本学名誉教授、日本学士院会員、末永雅雄先生から、考古学研究に資するようにと、2領の復原胄の寄贈をうけた。

関西大学考古学研究室は、昭和27年4月、末永先生の着任によって開設され、一昨年満30周年を迎えるにあたり、本学において先生の声咳に接し、指導をうけ、現在考古学の調査、研究に従事している卒業生のなかから36名のものが論文を提出し『関西大学考古学研究室開設30周年記念 考古学論叢』を刊行した。その編集に際し、末永先生から巻頭論文を拝受した。

先生の論文は「三尾鉄から鉄形への連想」と題するものであった。三尾鉄というのは、古墳出土の衝角付胄の鉢の頂部につく一種の装飾であり、これは兵庫県の雲部車塚の出土遺物の観察により、後に大阪府百舌鳥七観古墳や大塚山古墳出土遺物によって用途が明確になったものである。先生は「私の考古学歴としての生涯における発見ともいうべき事項であった」と述べられている。最近では豊中市大塚古墳の遺物にも衝角付胄に着装

したままの状態出土し、注目をあつめた。

「鉄形」とは、中世の胄の正面を飾る前立付の装具で、大鉄の鉄の部分に似ているところから、鉄形と称されているものである。

さて末永先生は「この三尾の形は時代と推移を経て中世武家の胄における三ツ鉄形へ移行してゆくものではないか」と考えられた。

先生は昭和54年来、京都東山三十三間堂近くの法住寺殿跡出土の鉄鉄形の基部正面、両側部に小双孔のあることや、信濃清水寺蔵の胄にみられる鉄形及び伊勢神島八代神社蔵の鉄形台の事例を挙げられ、「衝角付胄の三尾鉄が頂辺から前額部に下って、その形成が誇張されたものではないかという一点であり、三尾鉄の意識には中世以後の三ツ鉄形にも通じるのではないかと考える次第である」と示唆にとむ見解を示された。

先生のこの考察は、単なる推論ではなく、実際に胄を復原して示されたところに実証的研究の基盤がある。先の大著『日本上代の甲胄』は古墳出土の甲胄の実物模型をもって復原研究されたもので、これらの資料は一括して本学に寄贈され、現在考古学資料室に展示、保管している。

今回の論考「三尾鉄から鉄形への連想」にも、前立付装の想定復原を製作され、それに基づいての考察であった。

本論文が刊行された直後、この資料は先きに先生から寄贈うけた資料と併せて、関西大学で所蔵することが最も望ましいという先生の御好意によって、寄贈をうけることになった。

大学では、こうした貴重な資料を拝受し、考古学資料室で保管、展示することにした。

(網干善教)



末永雅雄先生御寄贈「胄」

神田孝平著『日本大古石器考』補遺 角 田 芳 昭

神田孝平(1830~1898)によって、わが国最初の英文による考古学図譜『Notes on Ancient Stone Implements of Japan』が発行されたのが明治17年(1884)である。そしてその2年後に『日本大古石器考』として邦文のものが叢書閣より発行された。このたび(昭和58年10月)『復刻日本考古学文献集成<6>』(監修・解説齊藤忠)として第一書房より刊行されたので、若干の解説とその後の研究により判明したこともあるのでここに記してみたい。

阡陵第2号(昭和55年11月)において若干ふれたが、その後第一書房より復刻され、齊藤忠氏の詳細な解説があるので、ここでは資料そのものについて考えてみたい。

淡塵神田孝平は明治31年(1898)7月没し、東京谷中天王寺の墓地へ葬られた。神田氏が生前に蒐集された書画骨董類のうち、最大の「石器資料」については、一時古美術商の手に移り、その後当時の毎日新聞社長本山彦一氏が引きとられ購入された(末永雅雄先生談)。恐らくこの話が決った裏には伊東巳代治氏(明治の官僚政治家)などが関係されたものと思われる。伊東氏は神田孝平が兵庫県令の折、県の役人として採用し、重要した人であり、神田が元老院議員として転ずるに及び、彼も神田の後を追ひ兵庫県を退職し、東京へ出た。そして伊藤博文へ紹介され、その後伊藤の知遇を得、彼の懐刀として明治政府の発展につくした人物である。終生伊東巳代治は遺族の面倒なども良くみており、また生前には神田氏と伊東氏との交際書簡が多数残されている。

この写真の書簡も伊東巳代治宛のものの一部で、『日本大古石器考』を刊行したので謹呈すると文面に書かれており、恐らく真先に彼に贈呈したのではあるまいか。とすると明治19年4月25日に邦文のものが発行されているので、19年5月頃の書簡とみて間違いはあるまい。

この『日本大古石器考』の資料を本山彦一氏が購入され、本山コレクションとして本山邸内富民協会農業博物館へ展示されていた。本山氏の没後ご遺族のご厚意により、末永雅雄先生(本学名誉教授)を通じて、本学がこれを購入し所蔵しているのである。第1図版より第24図版までに約17種類269点の石器を示し、諸々の名称で紹介してい

る。①鏃石、②天狗匙、③石鏃、④銅石、⑤雷斧、⑥石鋸、⑦雷槌、⑧石劔・石刀……などである。

資料については大部分が出所不明であり、伝世品が多い。しかし各種の石器が存し、研究上貴重な資料である。曲(勾)玉資料については真偽の判別が困難なものがあり、玉石混淆である。この資料のみは今後の研究が必要とされる。

石器資料において石質の鑑定を専門家に依頼し、その結果の学名を記していることは当時としては偉大な業績である。この石質調査を現在まで継続されていたならば、今日の石器研究も一段と進歩していたのではないかと推測する。当時の調査は「理学士和田氏ノ鑑定ニ依ル」とあり、和田氏とは和田綱四郎(1856~1920)のことであろう。

(齊藤忠氏解説による)明治18年東京大学教授となった人で『日本鉱物誌』の著書がある。

本学においてもこの資料中より、昨年工学部の鈴鹿恒茂先生にお願いし石質調査を行ない、その結果を報告書にしてまとめた。それを対比してみると、当時の鑑定と今日のそれでは少し差違が認められる。大古石器考より19例の調査が行なわれており、4例は当時の学名と同様の結果が出ている。その他についても若干の相違が認められる。次ページに調査された結果の一部を転写する。【石質調査最後の〔 〕内のものが和田氏鑑定によるもの】。今後は顕微鏡組織観察、比重測定、X線解析試験などを行ない、石製品の石質の解明をしていきたい。

過般出般仕候石器考一部致進
呈候御笑覧被下らば大幸ニ御座候
其他二品暑中御見舞之驗まで
呈御叱留是祈
伊東先生
孝平 拝



神田孝平自筆書簡

『日本大古石器考』 石器石質調査



磨製石斧

出土地不詳

上下 8.5cm

左右 4.2cm

岩石名：蛇 灰 岩

苦土橄欖石より変質した蛇紋石を多量に含有する大理石（石灰岩）で、小刀で傷つくほどの軟質岩である。

磁性 なし

神田孝平著『日本大古石器考』第4版第7図収載〔角石〕^{ホルンストーン}



磨製石斧

出土地不詳

上下 6.7cm

左右 3.8cm

岩石名：緑 泥 片 岩

岩石は暗緑・濃暗緑色の縞模様をなし、片理構造をもつ結晶片岩である。

緑泥石を主成分とし、他に緑簾石・曹長石などを含み、輝緑岩・輝緑凝灰岩などに由来した変成岩である。本岩はやや蛇紋岩化されている。

磁性 なし

神田孝平著『日本大古石器考』第4版第5図収載〔角石〕^{ホルンストーン}



磨製石斧

出土地不詳

上下 9.8cm

左右 3.1cm

岩石名：緑 泥 片 岩

岩石は濃緑色で片理の発達した結晶片岩である。主成分は緑泥石で、ほかに緑簾石・曹長石などを含み、輝緑岩などのような塩基性火成岩またはその凝灰岩より誘導された変成岩である。

本岩はかなり蛇紋岩化作用を受けており、蛇紋石や陽起石なども生じているものと思われる。

磁性 なし

神田孝平著『日本大古石器考』第4版第2図収載〔角石〕^{ホルンストーン}



石 錘

新潟県出土

上下 20.0cm

左右 10.2cm

岩石名：蛇 紋 岩

橄欖岩より変質したものと思われる。変成岩である。ほとんど橄欖石よりなり、輝石を少量含むが、蛇紋岩化にさいし、これらの鉱物は形も質も共に変って、蛇紋石・緑泥石などとなっている。

磁性 なし

比重 非常に大で重い

神田孝平著『日本大古石器考』第13版第4図収載〔緑石〕



独 鉦 石

出 土 地 不 詳

上下 4.4cm
左右 15.3cm

岩石名：輝 緑 岩

斜長石および緑泥石（輝石より変質したもの）の斑晶が多く認められ、岩石はやや蛇紋岩化されている。〔半深成岩〕
神田孝平著『日本大古石器考』第11版 6 図収載〔緑石〕



独 鉦 石

出 土 地 不 詳

上下 6.5cm
左右 22.0cm

岩石名：蛇 紋 岩

斑岩が橄欖岩より変質・誘導された岩石である。
磁性はない。〔変成岩〕
神田孝平著『日本大古石器考』第11版第 1 図収載〔緑泥岩〕



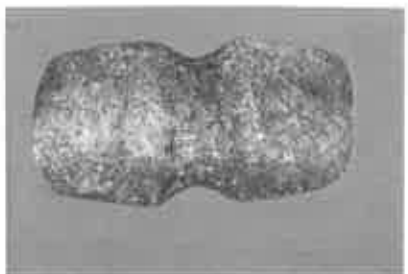
独 鉦 石

新 潟 県 出 土

上下 8.7cm
左右 16.0cm

岩石名：蛇 紋 岩

橄欖岩より変質・誘導されたものと思われる。
磁性はない。〔変成岩〕
神田孝平著『日本大古石器考』第13版 3 図収載〔蛇紋岩〕



独 鉦 石

出 土 地 不 詳

上下 8.5cm
左右 14.7cm

岩石名：玄 武 岩

斜長石・輝石を主成分とする緻密な黒色の塩基性火山岩である。
輝石の大きな斑晶が石基中に顕著に認められる。
神田孝平著『日本大古石器考』第11版 8 図収載〔花岡岩〕



せいろうとうがたせつき
青龍刀形石器

出 土 地 不 詳

上下 9.9cm
左右 35.0cm

岩石名：緑 泥 片 岩

本岩石は帯緑黄褐色を呈する。主成分鉱物は斜長石・輝石で輝緑岩（半深成岩）のように思えるが、やや絹糸光沢を有し、やや片理の発達も認められるので、緑泥片岩（変成岩）とみなす。斜長石はソオシユル石化して曹長石や緑簾石などに変質し、輝石は緑泥石や陽起石などになっているものもある。
磁性 なし、比重 大。
神田孝平著『日本大古石器考』第10版第 2 図収載〔緑泥岩〕

愛媛県新居浜市中萩町横山出土の平形銅剣

考古学等資料室所蔵の本山コレクションにはいくつかの青銅器が含まれているが、そのうち平形銅剣は2本（あるいは数本）出土した中の1本と伝えられるもので、片面に「伊預新居郡萩生村出土」と墨書された紙片が貼付されている。本資料は多くの概報告では愛媛県新居郡萩生村出土と記載されており、これは、現行政区画によれば新居浜市中萩町横山にあたる。ここでは、銅剣実測図を掲載し、あわせて、その観察結果を述べる。便宜上、上図をA面、下図をB面とする。

銅剣は、全長46.4cm・刃部最大幅約12.5cm・最大厚0.3cm・重量350gを測る。色調は錆のため全体に青緑色を呈するが、茎部分は後世のものと思われる削り出しのために赤銅色の地肌を露出している。形状は穂先が膨らみ、棗状突起は大形である。鑄は表現されていない。脊の断面は、その稜が不明瞭で楕円形に近い。

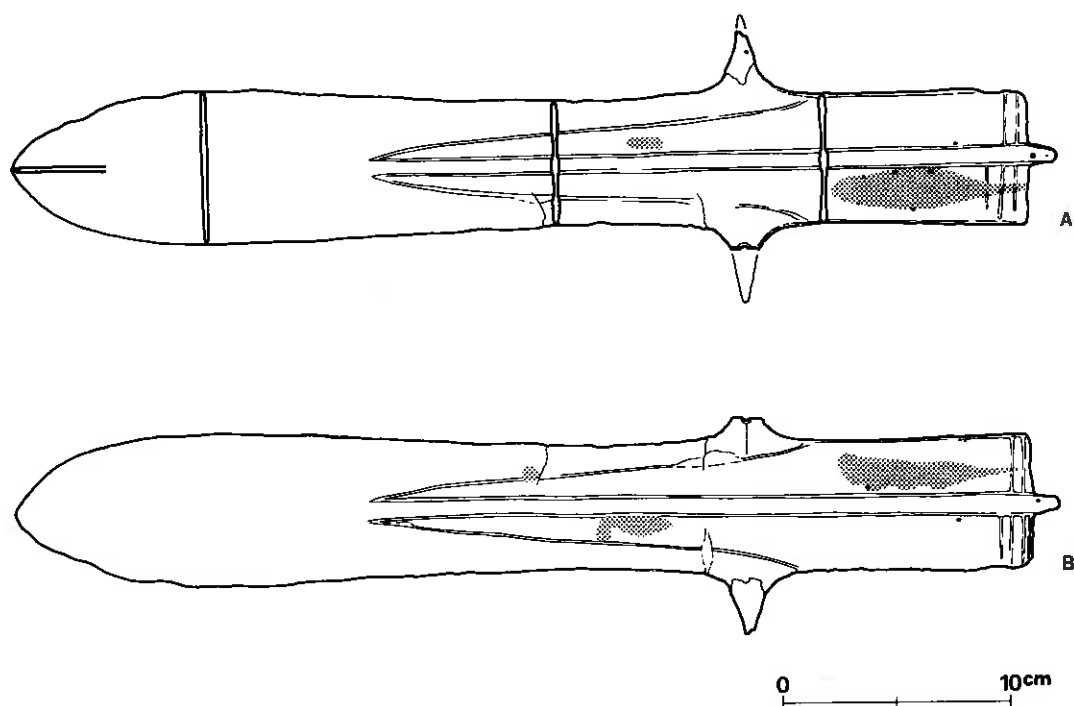
茎は小さく、棗状突起は両側とも不完全で特に一方は基部のみ残存する。鋒部は片側に若干の欠損がみられ、先端は突り気味に終わる。穂の先端はいずれも不明瞭である。研ぎは各部とも明瞭なものではなく、鈍い印象を与えるが、棗状突起部か

ら関部に至る周縁では、甲張りを落とした際に端面が部分的に生じている。関部には、A面2条—3条、B面2条—4条のごく低い突線が鑄出されている。

剣身には2か所に亀裂が入り、その付近の稜線が歪んでいる。また、関部および棗状突起部から穂の先端にかけては、湯まわりの悪いと思われる部分（アミ部分）が両面にわたって数か所認められ、器厚が薄い上、鑄造に際して生ずる鬆が多くみられる。棗状突起部はB面上側のそれにのみ中央部に稜線がみられる以外は、鑄上がり不完全である。また、A面上側の棗状突起には、平形銅剣に多くみられるという補鑄が施され、対をなす一方には、直径約3mmの半円孔状の挟りがある。これは補鑄未成部分と思われる。茎部分においても鬆が認められる一方、前述のように後の削り出しのため原形が損われている。

以上の諸点から、横山銅剣は松山市穂又例他に類似する平形銅剣Ⅱ式に属する一例と考えてよい。

（合田茂伸）



横山出土の平形銅剣実測図

古式土師器（高杯）

高杯は、日常或いは祭祀時に食物を盛る器として用いられ、供献土器とも呼称される。写真の高杯は古墳時代のもので、杯部外面には「武庫郡精道村百塚古墳堂□□発掘」、脚部には「摂津武庫郡精道村宮□石ヶ平古墳」と墨書されている。

この高杯の法量は、口径15.6cm、杯部脚部接合部径3.1cm、裾部径11.2cm、器高12.9cmであり、色調は黄褐色である。器表の保存は悪く、その観察は難しい。ただ脚中部内面にはシボリ痕が認められる。杯部は深く、口径は受部径を凌ぎ、屈曲部の段がわずかに認められること、また脚端部は大きく折れて外反していることから、広義の布留式の範疇に含まれる。

摂津武庫郡精道村は、現地名では兵庫県芦屋市精道町近辺に比定されるが、「百塚」と称される地は、西宮市北山山塊の端部・北ヶ原台地の上ヶ原古墳群を指すことが、大正二年（1914）に神呪池から発見された遺物に関する公文書類より類推され、位置的にかなり隔たっている。上ヶ原古墳群は『摂津志』・『考古小録』等の記録によると、前方後円墳（車塚古墳）を含む数十基の横穴式石室を主体部とする古墳で構成されており、写真の高杯の編年上の位置付けとは年代的に隔差があるため、その出土は考え難い。従って、現存す



土師器（高杯）

る古墳の中で時期・位置等を考慮し、敢えてこの高杯を出土した古墳を比定するならば、芦屋市打出春日町153番地に所在する金津山古墳が挙げられる。『摂津名所図絵』『西摂大観』『武庫郡誌』には、この地の字に「堂の上」の名が存したことが記されており、先の墨書とも関連する。金津山古墳は、現状では径約40m高さ約4mの円墳であるが、前方後円墳の可能性を有し、内部主体、外部施設等は不明である。遺物の検出・採集は現在のところ知られていないことから、この高杯の資料的価値は高いと思われる。

資料

須恵器

この須恵器は、島根県隠岐諸島・島後の西郷町、飯の山横穴より一括出土したと伝えられる遺物である。台付長頸壺2点、長頸壺1点、短頸壺1点、蓋杯1点の計5点の資料を観察すると、ほぼ同時期の所産と考えられ、蓋のつまみが円形に台状の突帯が巡るものである杯蓋の型式等から、これらは陶色編年のIV型式第2段階に比定される。

飯の山横穴は、昭和29年に行なわれた隠岐総合調査



須恵器

紹介

の報告に依ると、原形をとどめたもの1、奥壁の一部を残し横穴であることが認められるもの3の計4基が確認されている。その中で、原形の明らかなものに壁画を有する横穴が1基存在する。その玄室は長さ約3m、幅4mの隅丸方形の平面プランを呈し、天井は穹隆形で、高さ1.56mである。壁画は、奥壁中央部の壁面に彫り込んだ線で描かれた稚拙なものであり、盾・人物・動物らしい図柄からは、北九州の装飾古墳に見られる手法・表現が看取される。

本資料は、この壁画古墳出土のものではなく、同横穴群中の他の横穴から出土したものであり、その出土状態は明らかでない。ただ玉類が伴出していることから、それを被葬者の身に付けていたものとする、これらの須恵器は供献品として副葬していたものと考えられる。

本型式の須恵器は、いずれも横穴式石室や横穴墓が普及した後のころのものであり、個々の遺物に関しては、特記すべき点はない。

近畿の美術館・博物館施設—国立博物館施設—

文化施設としての博物館への市民の認識は近年非常に高まり、特に若い人達のデートの場所ともなっている。

そこで博物館施設について管理者別あるいは形態別に、今回より諸施設を紹介してみたい。国立の機関として次の7施設が存在する。

「**京都国立博物館**」は国立の総合博物館として、東京国立博物館、奈良国立博物館と並んで西日本における代表的な博物館である。明治30年5月帝國京都博物館として開設され、大正13年恩賜京都博物館となった。昭和27年文化財保護法の施行に伴ない、京都国立博物館として改称され現在に至っている。

本館はレンガ造りのフランス・ルネサンス様式の平屋建で古風な趣を見せ、明治建築の代表作として昭和44年3月重要文化財に指定された。ここは特別展示場として使用されている。新館は昭和41年完成し、1階に7室の陳列室とロビー、刊行物売場、講堂等があり、土曜講座、講演会、映画鑑賞会などが行なわれている。2階は8室の陳列室と中央室があり、中央室では特別陳列が行なわれる。その他地階、収蔵庫、調査室、京都文化資料研究センター等がある。

この他に同地内に「**文化財保存修理所**」が昭和55年完成し、国宝、重要文化財等の修理が行なわれている。市民への事業として『図録』『京都国立博物館だより』の発行、土曜講座、夏期講座、友の会等があり、普及活動も活発に行なわれている。

「**奈良国立博物館**」は明治28年4月帝室博物館として開館され、33年奈良帝室博物館、昭和27年奈良国立博物館と改称され現在に至っている。本館は京都国立博物館と同様に明治の代表的洋風建築として昭和44年重要文化財に指定されている。新館の建築にともないここは特別展示の時のみ使用されている。新館は昭和47年末完成し、48年より開館された。鉄筋コンクリート造の二階建て、外観は校舎造に似た高床式建築です。一階に休息所、講堂等があり、二階が陳列室、収蔵庫などである。仏教美術、仏教考古の研究のメッカとして当館の持つ意義は大きい。行事として鑑賞会、講演会、講座、実習、見学会、友の会などが行なわれており、仏教美術に関する出版物も刊行されている。

「**国立民族学博物館**」は昭和52年開館された。世界の諸民族に関する資料を収集保管し、公衆の観覧に供するとともに、民族学に関する調査研究を行ない、大学院教育と国立大学の共同利用の機関としての役割を目的として設立された。国立の民族学研究の唯一の博物館であり、各種刊行物の

編集と発行、民族学資料の収集と保管と情報提供、その他教育活動を行なっている。オセアニア、北・南アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、東南アジア、東アジア（日本）など各地域ごとに諸民族の社会と文化を構造的に理解できるよう展示されている。実物、映像、音響三位一体の展示に特色がある。

「**国立国際美術館**」は昭和45年日本万国博覧会が開催された折、万国博美術館が設立されその施設を受け継ぎ昭和52年に開館された。展覧会は、古代～中世におけるアジア大陸からの美術、近世～近代における西洋美術との関係および現代美術における国際交流を主テーマに変化にとんだ企画展示を行ない好評を博している。また常設展も充実させている。収蔵品はミロ「無垢の笑い」ピカソ「道化役者と子供」カルダー「ロンドン」ムーア「ナイフ・エッジ」などがある。

「**京都国立近代美術館**」は昭和38年国立近代美術館京都分館として発足した。昭和42年6月京都国立近代美術館として独立し現在に至っている。施設は京都市の観業館別館の1・2階を改装して設立されたものであり、美術館としては小規模である。工芸の蒐集に力を入れ、河井寛次郎の全貌を示す「川勝コレクション」北大路魯山人、浜田庄司らの陶芸資料や漆工、染織等資料と所蔵する。長谷川潔の版画蒐集は著名である。京都を中心とする近代美術の回顧、展望を試みるとともに、変貌する現代美術の動向を国際的な視野から把握し、その様相の紹介に努めている。昭和61年横文彦氏の設計による新館が完成する予定である。

「**奈良国立文化財研究所飛鳥資料館**」は昭和50年3月開館され、仏教伝来の6世紀から8世紀頃の資料が中心として展示されている。展示室は6つのコーナーから成っており、第2展示室は特別展示に使われており、過去に著名な遺跡の遺物等が展示され、研究資料に供されている。また多くの実物資料を複製し展示し見学者の理解に役立てている。資料閲覧室では飛鳥に関する参考図書類も閲覧できる。

「**奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館**」は昭和45年4月開設された。平城宮跡の発掘資料の整理の終了したものを展示しており、木器、金属器、土器、瓦、木簡を中心としている。そのほかにはパノラマ模型や建物復元模型、写真パネル等も展示されている。毎週金曜日には露出した遺構をそのまま見せる覆屋特別公開もしており、遺跡博物館としての保存整備が着々と進んでいる。平城宮跡の全貌も間もなく解明されるであろう。今回は企業博物館を紹介してみたい。



京都国立博物館

〒605 京都市東山区茶屋町527
☎075-541-1151



文化財保存修理所

〒605 京都市東山区茶屋町527
☎075-541-1151



奈良国立博物館

〒630 奈良市登大路町50
☎0742-22-7771



国立民族学博物館

〒565 吹田市千里 万国博記念公園内
☎06-876-2151



国立国際美術館

〒565 吹田市山田小川41-1
☎06-876-2481



京都国立近代美術館

〒606 京都市左京区岡崎円勝寺町
☎075-761-4111



奈良国立文化財研究所飛鳥資料館

〒634-01 高市郡明日香村奥山601
☎074454-3561



奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館

〒630 奈良市佐紀町
☎0742-34-3931

◎ 資料寄贈

胄2領

昭和58年度に末永雅雄先生ご寄贈の胄2領を受領した。いずれも衝角付鋳形胄であり『三尾鐵から鋳形への連想』(関西大学考古学研究室開設参拾周年記念考古学論叢)論文のものである。詳細は8ページを参照されたい。

◎ 一般公開について

「開かれた大学」構想の一環として、大学所蔵の考古・歴史・民俗等の資料約3000点を一般公開し、併せて公開講演を行なった。約400人の見学者と聴講者があり、東は名古屋から西は岡山までの人々の見学があった。そして終日熱心に見学され、諸々の質問などもあり、公開した意義があった。

公開日 昭和58年10月24日(月)～10月30日(日)

公開講演会 昭和58年10月30日(日)13～16時

講演者 文学部教授 網干善教氏

「関西大学所蔵考古学資料について」

文学部教授 横田健一氏

「古墳時代人の生活と文化」

◎ 『考古学等資料室紀要』創刊

昭和58年度事業計画の一環として『関西大学考古学等資料室紀要』が創刊された。

昭和49年大学院学舎が改築され、その年の夏引越して以来10年目、ここによく創刊をみるに至った。

大庭脩文学部長の序文と7編の論文が発表され、加えて資料編として資料室概要、博物館学課程及び資料室規程などが収められている。

◎ 閲覧人員

年度	51	52	53	54	55	56	57	58
人員	307	300	243	372	597	404	360	418

編集後記

第9号をお届けいたします。今号より16ページとなり、紙面の充実がはかられました。諸先生方にはご無理な原稿を短期間にお願ひし申し訳ありませんでした。ここに感謝申し上げます。

昭和58年度は『資料室の一般公開』や『紀要』類の創刊などがあり、多忙な1年ではありましたが、充実した1年でもありました。『考古学等資料室紀要』の発行につきまして、諸先生その他の方々のご指導により、予定通り刊行できたことは幸いでした。また原

稿等心良く引き受けて下さったことに感謝申し上げます。

阡陵も次号が10号ですので、特集号が計画されております。諸先生方のご指導をお待ちしております。

表紙の写真は岩手県北上市更木出土の「土偶」で、縄文時代晩期の遮光器土偶と呼ばれているものである。時代の移り変りとともに土偶の形式も変化しており、土器形式の変化を基本に分類研究等がされている例もあります。

〔角田芳昭〕